

ローマ・ビザンツ時代の埋葬の変遷を探る

—ラマッラー～ナブルス間(パレスチナ自治区)における分布調査(2025年)—

長尾 琢磨 中部大学中部高等学術研究所・日本学術振興会特別研究員(PD)

Investigating the Transition of Burial Practices in the Roman-Byzantine Period: Distribution Survey between Ramallah and Nablus, Palestine (2025)

NAGAO, Takuma Post-doctoral Research Fellow, Japan Society for the Promotion of Science, Chubu Institute for Advanced Studies

長尾
琢磨

1. はじめに

1世紀後半、第一次ユダヤ戦争の結果、ローマ帝国によりエルサレムは陥落しユダヤ人の移住が進んだ。2世紀前半には第二次ユダヤ戦争が起り、敗北したユダヤ人はエルサレム周辺への立ち入りを禁じられ離散の民となった。ユダヤ人の移住・離散、サマリア人の勢力拡大、ローマ帝国民や異教徒の入植など、1世紀後半からビザンツ時代(4世紀～7世紀)にかけてのイスラエル・パレスチナ自治区における人口動態は複雑であり、それに伴う文化的な変遷を考古資料から明確に捉えることはできていない。

この一因として、当時多くの人々が移住・入植したと考えられるパレスチナ自治区の情報が不十分なことが挙げられる。この情報不足を解消するため、2018年からヨルダン川西岸地区北部(ラマッラー～ナブルス間)で墓地を主対象とした分布調査を開始した(長尾2023)。ユダヤ人を中心とした在地民と入植民の埋葬習慣は大きく異なっており、墓の形態や分布を明らかにすることで、当時の人口動態と埋葬文化の変遷を明らかにすることを目的としている。

2023年度調査ではローマ時代ユダヤ人の離散状況を再検討することを主目的として、グレコ・ローマン様式のファサードを持つ墓を有する墓地を対象に分布調査を実施した(長尾2024)。2025年度8月の調査では調査対象を広げ、ラマッラー～ナブルス間における墓地を有する遺跡の分布調査を行った。

2. 2025年度調査の概要

調査遺跡について、まずは過去の踏査記録を参照した。教会堂や見張り塔などの遺構と比較して墓は十分に記録されておらず、その有無のみ報告されている遺

跡が多いため、調査の余地が残されているためである。次に、パレスチナ観光遺跡庁や現地のツアーガイドより、未調査遺跡の情報提供を受けた。これらの情報に基づいて調査遺跡を選定した。

主な調査対象は横穴墓、縦穴墓であり、時代を限定せず調査を行った。また、遺跡の性格や年代幅の理解のため、墓地周辺の建造物や農業施設などの遺構も記録した。2025年度調査は8/2～8/26にかけて実施し、15遺跡で分布調査を行った(図1)。53基の墓の3次元計測を行い、15基の墓を写真で記録した。墓地の周辺にはオリーブプレス、貯水槽、十字軍時代の塔など多数の遺構が分布しており、8つの遺構を3次元計測し、それ以外は全て位置情報の記録と写真撮影を行った。加えて、比較資料としてエルサレム(Jerusalem)の3つの墓地で3次元計測を行った。

3. 既調査墓地における分布調査

調査墓地のうち、ナブルス(Nablus)、キルベト・クルカッシュ(Khirbet Kurqush)、アブード(Aboud)、ティブナ(Tibnah)、ビルン(Bil'in)、サッフア(Saffa)、カランディア(Qalandiya)は既調査である。そのほとんどは、主だった墓や遺構のみが記録され調査が完全に完了していない遺跡である。本稿では成果を抜粋して報告する。

ナブルス

アスカル霊廟(Askar Mausoleum)(図2)と西霊廟を調査した。これらを含む霊廟群は過去に発掘・記録が行われている(Magen 2009)。どちらも岩盤の掘り込みと切り石による建築を併用したタイプであり、アスカル霊廟は1基、西霊廟は3基の墓が連結していた。アスカル霊廟はコリント式のファサードを有しており、墓の入口は可動式の扉型の封石で塞がれ、入口の前に

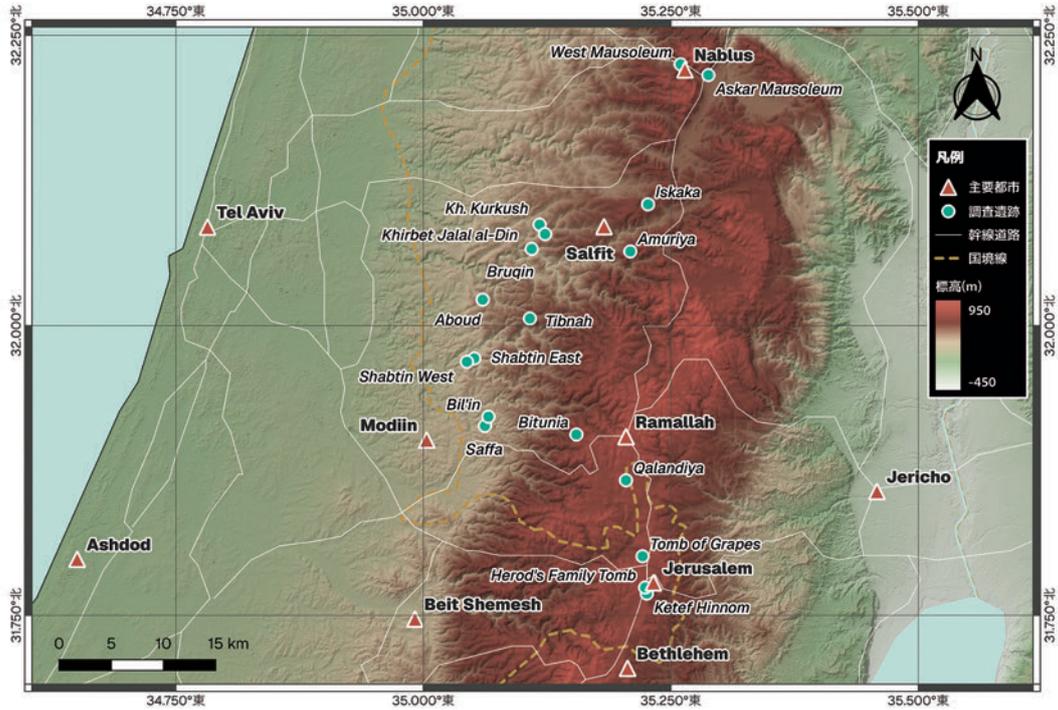


図1 2025年度調査遺跡



図2 アスカル霊廟平面図、ナブルス

は白いモザイク床が敷かれていた。西霊廟でも扉型の封石が確認され、入口上部には格子窓が設けられていた。墓の前庭部には石敷きの床があり、東西の端には貯水槽が確認された。アスカル霊廟では10基、西霊廟では23基の石棺が現存しており、タブラ・アンサタや牛の頭、紐状装飾などが確認された。同墓群は出



図3 ワディ下段のロクリ墓と石切場、アブード

土遺物によって2世紀から利用が始まったとされており、同地域に例のない建築・装飾からローマ帝国からの移住民の墓地である可能性が考えられる。

アブード

墓地は現在の町の西部に位置しており、1~2世紀頃の9基の墓が報告されている(Magen 2008)。過年度調査では3基の墓を計測し、墓地の簡易的な分布調査を行った。2025年度調査では、墓地が位置するワディ(潤れ谷)の悉皆的な分布調査を実施した。既知のワディ中段の墓地では新たに10基のロクリ墓を計測した。また、ワディ下段(図3)と頂上部では新たなロクリ墓を発見し、各2基ずつ計測した。これらはローマ時代の墓と推定される。これらの墓地から東側、町

に近い平坦部には過年度に発見された墓地があり、ロクリ墓1基、アルコソリア墓2基、地下式アルコソリア墓(縦穴墓)6基を計測した。後者2タイプはビザンツ時代に典型的なものである。また、アブードの横穴墓は石切場跡の垂直面を利用して造られているが、石切場は過年度に確認した以上に広範囲であり、ヨルダン川西岸地区北部では最大級の範囲であった。頂上部では石切場に伴って漆喰が塗られた貯水槽も合わせて確認された。

キルベト・クルカッシュ

墓地はブルキン(Bruchin)の町の東部に位置しており、6基の墓が報告されている(Conder and Kitchen 1882: 337-340)。過年度調査ではグレコ・ローマン様式のファサードを持つ1基の墓を3次元計測した。同墓地もアブードと同様に石切場跡を利用して造られており、これら6基の墓は採石によって生じた方形の区画に造られている。2025年度調査ではこの区画以外で分布調査を行った。同区画の北部には別の石切場跡があり、3基のロクリ墓が確認された。これらは過年度に確認した墓と同様にアーチ状のファサードを有していた。過年度に調査した区画の南側には石切場跡を利用した約20m×10mの貯水槽が3つ位置しているが、その周辺に同様のロクリ墓を3基確認し、1基を計測した(図4)。これらはローマ時代の墓と推定される。

この墓地の西、丘の頂上部には十字軍時代～マムルーク朝時代のものと推定される塔や大型建造物が位置しており、その南部に地下式アルコソリア墓4基、貯水槽とオリーブプレスが確認された。建造物には教会堂の石材が再利用された痕跡は確認できなかったが、オリーブ压榨機やすり石の破片に交じり多量のテッセ



図4 貯水槽南側の岩壁に位置するロクリ墓、キルベト・クルカッシュ

ラが地表で確認されたことから、建造物の下に教会堂の基部が残存している可能性が考えられる。

4. 未調査墓地における分布調査

イスカカ(Iskaka)、キルベト・ジャラル・アルディン(Khirbet Jalal al-Din)、アムリヤ(Amuriya)、ブルキン(Bruqin)、シャブティン(Shabtin)、ビトウニア(Bitunia)は未調査墓地である。本稿では成果を抜粋して報告する。

イスカカ

墓地は町の北部に位置しており、テル・アブ・ザラド(Tel Abu Zarad)の西部に位置する。ワディの斜面には4基のロクリ墓、2基の横穴墓が確認され、そのうちドリス式の壁付き柱を持つファサードを有するロクリ墓1基を計測した(図5)。建築装飾を伴うファサードはエルサレム以外では例が少なく、墓の建築装飾の変遷を考えるうえで重要である。丘の頂上部には十字軍時代の建造物があり、その西側ではアルコソリア墓1基を確認した。

アムリヤ

同様に建築装飾を有するロクリ墓は、アムリヤでも1基確認し計測した(図6)。中央に2本の柱が設けら



図5 イスカカのロクリ墓、南壁(左)・西壁(右)立面図



図6 三連結アーチ状のファサードを有するロクリ墓、アムリヤ

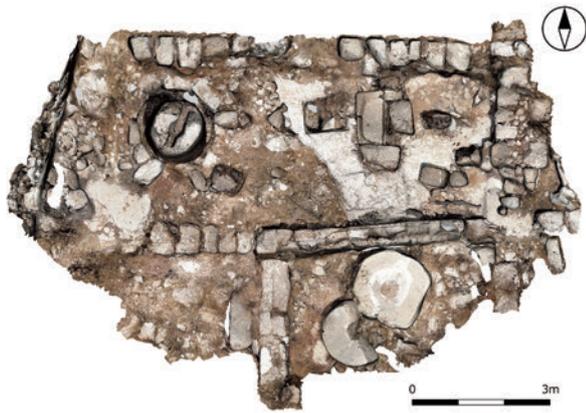


図7 農業施設平面図、シャブティン

れ、3つのアーチが造られる構造であり同地域では他に例はない。同墓の西側の丘には貯水槽、十字軍時代の塔が位置していたが、他に墓は確認されなかった。イスカカ、アムリヤのロクリ墓はおそらくローマ時代の墓であると考えられる。

シャブティン

墓地は町を挟んで東西に分かれており、西墓地では3基のロクリ墓を確認し計測した。周辺には飼い葉桶や貯水槽、オリーブプレス、ワインプレス、石切場が点在しており、墓地の南部にはオリーブ圧搾機を有する農業施設(図7)が確認された。また、丘の頂上部には盗掘坑があり、多量のモザイクの堆積が露出していた。東墓地ではロクリ墓3基、ベンチ墓3基、地下式アルコソリア墓1基、横穴墓2基を確認し、ロクリ墓とベンチ墓の計測を行った。ベンチ墓は鉄器時代Ⅱ期後半(前9世紀～6世紀)に主として利用されていた墓である。同時代の南ユダ王国に主に分布し、北イスラエル王国ではほとんど分布していないと考えられている。カランディア、過年度に調査したアル・ジブ(Al Jib)など、ラマッラー周辺の遺跡でのみベンチ墓が確認され、これを補強する結果となった。最北部のロクリ墓の前庭部や内部では、後期ローマ時代(2世紀～4世紀)の赤彩土器の口縁部、底部が確認されたため、同墓は少なくとも後期ローマ時代には利用されていたと考えられる。また、墓地の北部では十字軍時代の建造物が確認された。

5. 2025年度調査のまとめ

ヨルダン川西岸地区北部における分布調査は2018年から続けてきたが、2025年度調査によって同地域における墓と周辺遺構の分布について以下の傾向を捉

えることができた。1)ラマッラーに近い墓地では鉄器時代Ⅱ期のベンチ墓が確認されたが、シャブティン以北の墓地ではみられない。2)ロクリ墓とベンチ墓は同じ墓域に造られる場合が多いが、ビザンツ時代の墓は町や建造物に近い位置など別の場所に造られることが多い。教会堂が墓の立地に影響を与えている可能性が考えられる。3)ヨルダン川西岸地区北部ではロクリ墓が支配的であり、これは1世紀～2世紀以降にユダヤ人の移住が活発になったことが背景にあると考えられる。4)ほとんどの墓地には十字軍時代の建造物が伴っている。

以上のように同地域における情報不足は解消されつつあり、人口動態と埋葬文化の変遷の解明も進みつつある。しかし、多数の墓地を有するナブルス、ヨルダン川西岸地区南部は、現在特に状況が悪くほとんど調査ができていない。2025年度調査でも記録したが、ナブルスは霊廟(Mausoleum)やナブルス以南とは形態の異なるロクリ墓がこれまで確認されている。ヨルダン川西岸地区南部、特にヘブロン(Hebron)周辺ではグレコ・ローマン様式のファサードを持つロクリ墓が多数発見されている。人口動態と埋葬文化の変遷を検討するうえでは両地域の調査が必要であり、今後は状況を注視しつつ調査範囲を広げていきたい。

本調査は特別研究員奨励費「ローマ期パレスチナの埋葬文化の変遷と人口動態の復元—デジタル考古学への挑戦—」(25KJ0347)を受けて実施した。また、調査に協力いただいたパレスチナ観光遺跡庁のアウニー・シャムラ氏、ツアーガイドのイブラヒム・ザロール氏に心より感謝申し上げます。

■参考文献

- ・ Conder, C. R. and H. H. Kitchener 1882 *The Survey of Western Palestine: Memoirs of the Topography, Orography, Hydrography, and Archaeology*, vol. 2. London, Committee of the Palestine Exploration Fund.
- ・ Magen, Y. 2008 *Judea and Samaria Researches and Discoveries*. Jerusalem, Staff Officer of Archaeology.
- ・ Magen, Y. 2009 *Flavia Neapolis: Shechem in the Roman Period*, Volume 1, Jerusalem, Staff Officer of Archaeology.
- ・ 長尾琢磨 2023「ラマッラー～ナブルス間(パレスチナ自治区)における墓地の考古学的踏査」『西アジア考古学』24号 61-75頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 長尾琢磨 2024「ローマ時代ユダヤ人の離散状況—ラマッラー～ナブルス間(パレスチナ自治区)における分布調査(2023年)—」『第31回西アジア発掘調査報告会報告集』56-60頁 日本西アジア考古学会。